

## 「日本無政府共産党」への批判

(これは、本誌前号所載の相沢尚夫講演会記録に対する批判として寄せられたものである。かなりの長文であるが、無政府共産党と農村青年社という、一九三〇年代のアナキズム運動の特徴的な二潮流についての理論的解明——それは現在のわれわれの課題である——のための一助ともなると考え、全文をここに掲げるものである。

若干ことわっておきたいが、前号の文章は講演記録であり、録音テープを文章化し再編集したものであるから、本宮崎論文中の、農青の組織論から「黒連も自連もやめてしまえ」という結論が出てくる、という個所についても、宮崎氏の批判が対象の文章の一字一句についてのものであるので、この点読者は考慮に入れておいていただきたい。

われわれは、無政府共産党と農村青年社を相容れざる

宮崎 晃 (旧農村青年社)

敵対物としてとらえる視点、そこから一方が他方を全否定するのみという視点は不毛だと考えている。むしろ現在のには、宮崎氏が「農工両全」というコトバをかかげているように、都市における革命運動と農村における革命運動の結合こそがわれわれの追求課題である。そしてそのためのテコとして、三〇年代におけるこの二つのアナキズム革命潮流の解明が今日の課題としてあるのだと考える。

編集部)

さいしよにことわっておきたい。われわれは昭和四六(一九七一)一月、『日本アナキズム運動史を編さんする会』をつくった。この目的は、主として、既往の一九三〇年代の日本アナキズム運動の激動期を中心に、当時これらのそれぞれの運動の渦中にあつたひとたちに

よって、記憶の喪失、資料の散逸、関係者の死亡などによって、正確な真実の運動史がうしなわれないうちに、各自がめいめいの分野を分担して、資料性のある運動史を書きのことさうというにあった。そのときすでに執筆進行中であった『農村青年社運動史』は、翌、昭和四七年（一九七二）五月、上梓された。ご承知のかたもあるかと思う。ついで、昨、昭和四九年（一九七四）六月、『日本無政府共産党』が上梓された。ついで、この二月、自聯、自聯新聞副刊版刊行会から、『自聯、自聯新聞副刊版』が刊行される（予定）。と言えば、会のしごとがスムーズにすすんでいるように思われるかもしれないが、その真相はアルプスをこえるごとく困難である。

この『編さんする会』の小集会で、相沢君は、昭和四七年、一月と二月にわたって、日本無政府共産党について、あらましの解説をおこなった。（以下、敬称はすべて省略するのでおゆるしを乞う）しかし、それにさきだって、昭和四五年（一九七〇）の七月と八月号にわたって、雑誌『構造』に「日本無政府共産党―わが回想」を書いており、『会』での話も、その域を出ず、党の基本的なふたつの非法出版物のうち「綱領、規約、行動綱領」（

法律関係者にはひろく読まれている。しかし、この書の内容についてには知っているひともいたと思うが、相沢の解説にも、まったく触れられず、したがって、法律に門外のわれわれは、まったく知らなかった。もし、森長所論の存在を早く知っていたなら、それは、かなり内面的な叙述をしているから、『構造』の文とあわせ、「党」の理論的根拠についても、すでに、当時、内面的に、かなり詳細に「党理論」なるものを知ることができたであろう。海燕版『日本無政府共産党』もおくられてきたままで通読せず、今回『イオム』第七号所載の相沢講演を読み、ひるがえって、前記の海燕版を通読。文部省思想局『彙報』第四二号に、「まぼろしの党第一号パンフ」が見つかったことを知り、この第一号パンフは、昇格して「党テーゼ」として収録されていることも知った次第である。資料の発見をよろこびたい。

クロボトキンの『近代科学と無政府主義』には、八太舟三の訳書（昭和三年（一九二八）四月春秋社刊）がある。八太の訳書はロンドンのフリーダム版（一九二二）によったものであるが、そのほかにいくつもあり、一九一三年刊のフランス版は、かなり多くの個所で、フリ

（詳述省略）は見つかったが、いまひとつの、党の理論的主張をあつかった冊子は見つからず、将来とも発見は不可能にちかい。これが相沢の総括だった。『構造』の中でも右の冊子は「党の中央部一号パンフ」（相沢筆）となっている。注意して読めば（『構造』八月号二〇三頁下段）「レーニンは、八国家と革命Vの中で、資本主義から共産主義にいたる過渡期としての社会主義についての展望を詳細にのべている。しかし、この過渡期に関する検討が、ほとんどすべてのアナキストによってなされていなかったことは事実であった。。」ということだが、第一号パンフの骨子であると、かれは述べている。しかし、さきの『編さんする会』小集会での相沢の解説は、第一号パンフのこうした内容にふかたちいっての説明はなかった。要するに、外面的な話にとどまった。これにさきだって、これは筆者らの迂かつというべきだが、すでに昭和四五年一月と二月に（すなわち『構造』よりも半年はやく）『法学セミナー』に、森長英三郎弁護士が「日本無政府共産党事件」の題名で、かなりくわしく、官庁資料なども参照し、相沢の協力ももつめたよううで、執筆している。これは昭和四七年八月、森長著、日本評論社刊『史談裁判』第三集のなかにおさめられ、

―ダムにはない長文の補足をくわえていることが知られている。フランス版をテキストとして、勝田吉太郎が昭和四二年（一九六七）十一月、中央公論社刊の『世界の名著』第四二巻に訳出している。勝田は、その『はしがき』（「アナキズムの思想とその現代的意義」）に書いている「クロボトキン・無政府共産主義」の解説（五―四頁）のなかで、アナキストの戦術論を、つぎのように述べている部分があり、もちろん、それはクロボトキンの主張に拠ったものであるがその根拠となったクロの「近代科学と無政府主義」（勝田訳第五四六頁）の部分は、フリーダム版をテキストとした八太訳には、欠如している。勝田は、この部分から、つぎのように結論している。「アナキストの戦術論は、こうした不羈独立の自由人たちの行動に、広汎なイニシアティブを是認する。アナキストの理論には、結局のところ、これら先駆者たちのロマンティックな英雄主義の行動を制御するような、集団的、階級的な枠組みが本質的に存在しないのである。じつさい、アナキストは、革命の実際にあたって、かれらの行動を統制するような、党中央の政治指導といったものは、いっさいみとめない。なぜなら、既成権力を打ちたおすちからが、それ自体、ひとつの権力と化し、党中央の指

導權から、あたらしい形の暴政がおこるのをおそれるからである。

勝田が、この結論をひき出した、クロボトキンの『近代科学と無政府主義』第五章「行動の手段」第五四六頁には、つぎのように書かれている。「…必然的に斗争のための戦術の形成へとみちびく。そして、その戦術とは、すべての集団の中で、また、あらゆる個人において、最大限の個人的イニシアティブを発達させることにあり、その際、行動の統一は、目的の同一性によって、かつ、また、あらゆる理念が自由に表現され、真剣に討議され、その結果、正しいものとみとめられたときに持つべき信念のちからとによって、達成されるのであろう。こうした傾向は、アナキストのあらゆる戦術のうえに、また、かれらが結ぶ一切のサークルの内部生活のうえに、自己の刻印を押ししている：」

このあと長い文章があつて、フリーダム・フランス版共通の、つぎの文章がつづいている。八田訳では「…四〇年代に、フランスで一般に言われ、いまもなお、ドイツで言われている『プロレタリアの独裁』であるが、△会議▽であるが、われわれは、それにたいして、何等の信をおかない。われわれは、民衆自身が、即座に、

必要な新しい制度をつくりあげることによって、変革を達成しない限り、そのような政府は、変革を達成するために、なにごとをもなし得ないものであることを知っている。われわれがそう言うのは、われわれが政府に対して、個人的嫌悪をもつからではなく、歴史のすべてが、革命の波浪によって、政府の中に投げこまれたひとびとが、決して、かれらが期待されていたことを達成し得なかつたことを示しているからである。」勝田訳では「…それが四〇年代のフランスで名づけられ、いまなお、ドイツで呼称されている、あの『プロレタリアート独裁』であっても、あるいは、また、歓呼のこえでむかえられ、また、選出されて成立した△臨時政府▽であっても、また、△国民公会▽であっても、われわれは、それらいつさいの希望を托するものではない。そのような政府のなしうることは、なにひとつない…。」

過去においても、われわれの記憶にのこるアナキズム論争があつた。たとえば、フランスのCGTのモナトにたいする、一九〇七年、アムステルダム国際大会における、イタリーのアナキスト、マラテスタとの、アミアン綱領に対する論争のごときもそのひとつであらう。また、

当時、亡命ロシア、アナキスト・アルシノフが、ベルリンで在外ロシア・アナキストグループを組織、のち、パリにうつり、組織の機関紙「ジャーロ・トゥルダ」を発刊、一九二六年に、このグループは、政策と活動を調整する中央執行委員会をもつアナキスト総同盟の結成を提唱した。これに対して、マラテスタは「無政府主義組織論」を執筆して、全世界の同志に配布したが、それはあまり古いことではなく、わがくにでは、昭和四年（一九二九）、地底社から、その訳書が出された。よく知られているように、マフノはかれの長年の同志であるアルシノフを支持したが、アルシノフは孤立し、かれは、かつてマルクス主義者だったので母国のソビエトに帰投するにいたつた。マラテスタは、アナキストの組織を協盟（Parti）ということばでよび、当然のことながら、その基底を、自由合意、責任ある行動、自主自治においた。自由であるということは、気ままということではなく、自由ほど、人の肩に大きな重荷をおくものはない。

日本無政府共産党（以後、日本無共と略称する）時代には—昭和九年前後であるが、たとえば、石川三四郎のごときも、昭和九年十月には、「ディナミック」誌を廃刊、

八太舟三のごときも、昭和七年の自由聯合新聞への「農青批判」の一文が最後となり、ながく病んで、昭和九年一月長逝したが、かれの死亡を知らせる三面最下段に五行の「八太舟三はながく病んでいたが療養効なく死去した」とだけ、つめたく自衛新聞八九号に掲載された状態で、岩佐作太郎も、往年の生気はなく、また古い人々は、いや気がさしたというか、アナキズム戦線から脱落して、要するに、当時は、人材という点からは乏しかったというべきであらう。日本無共のひとにぎりのひとのうち、誰が、マラテスタの組織論を熱意をもって検討したであらうか。言うなれば、かれ等は、アルシノフが、よりふかくアナキスト革命運動について熟考し、その熱意が果実をむすぶような方法論を捨て去つたように、日本無共のひとびとも、結局、自身の甲羅に合わせた「党」と「過程」という穴を堀つたのではないであらうか。以下に、日本無共のテーゼなるものについて、かんたんに私見を述べたい。

相沢は、いわゆる日本無共のテーゼにおいても、大阪小集会（昨年一月九日）においても、レーニン『国家と革命』を骨子としている。言うまでもないが、本書

はレーニン自身の著作ではなく、マルクス・エンゲルスが、当時、アナキストのかれらの国家論と、党によって代表されるいわゆる過程論にたいする攻撃にたいして、それを防衛する目的で書いた、いろいろの刊行物のなかから拾いあつめて、レーニンがまとめたもので、かれはマルクス・エンゲルスを祖述したにすぎない。本書は、レーニンのあとがきによれば、ロシア革命の年である一九一七年の八月と九月に書かれたもので、十月革命の接近のために予定されていた第七章は書かれないまま、当面の問題に対応する目的から、ただちに同年十一月に出版されたものである。この書物の持つ意味は、共産党の過程論、したがって、かれらのプロレタリア独裁、換言すれば共産党独裁にたいするアナキストの攻撃にたいして、党を防衛するために、レーニンがマルクス・エンゲルスが祖述したものであることは、疑義をさしはさむ余地はない。

その『国家と革命』が日本無共というアナキスト・ビューローの党テーゼとなった。けれど、奇異というべきだ。日本無共テーゼの第二章「アナキー実現のための諸条件」のなかで、テーゼを書いた相沢は、つぎのように述べている（海燕版・『日本無政府共産党』一七二頁）

「：それ故に、われわれの理想、すなわち無政府共産社会が、いかなる条件のもとにおいて実現されるであろうか、ということに答えねばならぬ。この問題を、われわれが解決しないならば、いかなる戦略も確立し得ない。われわれはそれを次の三つの条件に集約することができる。

#### 一、生産力の発展

#### 二、資本主義の打倒

#### 三、意識の変革

クロポトキンは、その著『田園、工場、仕事場』のなかで、「資本主義の利害によって、生産力がその充分なる能力を活動させることが阻止されている：生産が消費のために組織されているのではなくて、むしろ、資本家が利潤を追求するために：生産力の発展を阻止する最大の原因である。アナキーは、豊富なる生産力を持たなくては存在しない」要するに、相沢テーゼは、豊富なる生産力なくしては、コンミュニンは成立しないと言うのである。上述の日本無共の基本的なテーゼは、レーニンの『国家と革命』のなかの主要部分（彰考書院、昭和二年（一九四六）月刊・小堀甚二訳、ドイツ版・一四八九頁に、きわめて酷似していることを、まず示したい。右掲

の部分は第五章のなかにふくまれるものであるが、その第五章は「国家の衰滅に」とつての「経済的基礎」と題するもので、読者諸氏は、この章名からしても、相沢テーゼの、コンミュニン成立のための必須条件としての豊富なる生産力が、思考のいちじるしい同一性があることに気が付かれるであろう。さて、すすんで『国家と革命』第五章第四項「共産主義社会のより高い段階」の一四八頁以下のレーニンのことばをつぎにかかげよう。「国家の完全な死滅に」とつての「経済的基礎は、非常に高い、共産主義の発展である。それは精神的労働と肉体的労働とのあいだの対立が消滅し、したがって、それとともに、今日の社会的不平等の、もつとも重要な源泉のひとつがとりのぞかれるほどの発展である。しかもこの源泉たるや、生産手段の単なる社会有への移行によつては、すなわち資本家からの単なる収奪によつては、絶対に急にはかたづけられえないものである。

この収奪は、生産諸力の巨大な発展を可能にするだろう。そして、われわれが、すでに今でも、資本主義が信ぜべからざるやり方で、どんなに発展を阻害しているかということ、すでに達成せられてはいる近代的技術の基礎に立つて、どんなに多くのことが促進されるかというこ

とを知るとき、われわれが、全幅の確信をもって、資本家からの収奪はうたがいがもなく、人類社会の生産諸力のすばらしい発展をもたらすというのは正当である。だが、この発展が、どんなにすみやかに、今後、進むか、どんな速度で、労働給付を止揚し、精神的労働と肉体的労働との対立を除去するにいたり、労働を八第一の生活の欲望に變化させるにいらしめるかということ、それは、われわれの知らざるところであり、知り得ないことである。したがって、われわれは、この過程がながい継続であることを強調しつつ、国家の不可避な衰滅について語る資格しかないし……。社会が八あらゆる人間が、その能力にに応じて、あらゆる人間へその欲望に応じてVという原則を実現したとき、すなわち、人類が、社会的共同生活の根本規律にしたがうことに馴れ、自発的に、能力に応じてはたらくほど、かれ等の労働が生産的になったとき、国家は完全に衰退する。」

右に引用した『国家と革命』の一部には、国家の衰滅していく過程も述べられている。他のいくつかの章でも、国家の衰退に関する過程についての説明は、究極的には、右に書かれているものと同様である。また、共産主義者が、国家の衰滅のあとにあらわれるであろう社会につい

でも、レーニンとは「コンミュニオン」と呼んでおり、古い文献（エンゲルスがペーベルにあてた一八七五年の書稿）のなかでは、国家が廃絶したのちの社会を、社会協同体（ゲマインウエーゼン・GEMEINWESEN、）とよんだことがしるされている。

しかし、マルクス、エンゲルス、ひいてはレーニン等の、この過程（従ってプロレタリア独裁、最近、わがくにでは、この不人気な独裁論をカモフラージュする目的でハディクタトトラVとよんでいるそうだが）、国家の衰滅論がこじつけの空想にすぎないことが、共産国家の内部から告発されつつある。ソルジェニツィンや、その他多くの人々をあげることは困難ではない。中国は、近時発表されたものによれば、マルクス、レーニン主義や、プロレタリア独裁をうたってはいるが、文革で中国民衆がまなびとったものは、中国の基盤となつて生きつづけるであろうし、われわれは、中国が独自のみちを歩くことをつよく希望するものである。中国が巨大社会制、すなわちソ連式コレクティヴィズムにはしらないことを心からいのるものである。人が死ぬのは巨大社会制の洪水のなかだ。

ミュニオン構造の欠如など、余白もないので別な論点にうつりたい。

相沢君の昨年十一月の講演によると、「純正アナキズムのなかで、八太舟三の考え方を具体的にやろう、ただし、八太のように大衆から離れて、アナキストだけで運動するのではなく、大衆の中で、一挙に自由コンミュニオンを作ろうと考えた人たちがいます。農村青年社の人たちです。農青の諸君は八組織は大きくなるほど、組織全体の機関が必要になつてくる。それが指導部に転化し、そこから権力がうまれる。だから、組織をもつてはいけない。もし作るとすれば、中央集権にならない網の目状の組織（無組織の組織）でなければならぬVという思想に立っていた。網の目組織というのは、中央がないのだから、各コンミュニオンが直接に連絡をとる……純正アナキズムをつきすめれば、当然、そこに至るわけで、そこから黒連も自連も解体してしまえ、という主張が出てくる。」かれは、いろいろとまだならべているが、大体の言分はこれでわかるので、ここで相沢説を一応打切る。

どうでもよいことであるが、網状平面組織が「無組織

相沢テーゼを、その条項ごとにとりあげて詳細に批判するとすれば、なお、多くの頁をさき、とうていゆるされないが、テーゼは端的に言えば、レーニンの『国家と革命』の忠実な模倣である。しかし、差異がありとすれば、「アナキー建設のための諸条件をつくり出すために、一時的に、権力を把握することは、その内容を問題にしないかぎり、われわれもまた、マルクス、エンゲルス、レーニンと同一である。だが、その相違は、プロレタリア国家が死滅するものか、廃棄すべきものかという点にある」（海燕版一九〇頁）しかし、残念ながら、この部分のぞいて、すべての部分でマルクス主義に立脚した相沢テーゼが、ここにいたって突如として、唯物史観をたたきのめし、生物学に足場をおき、自主・自発の行動を内容構成とするアナキズムに片足をのせ、日本無共が、そうしたいと思つたとき、何等の理論誘導もなく、過程論は消え去り、国家を、恣意的に廃絶するという論理は、空想と言うほかはない。

しかも、相沢テーゼの、この重大な過程消滅論が、わずかに、三行を費やしただけで片づけられてるのである。全く没理論というほかはない。そのほかにも触れた点はあるが（たとえば、農工合体、小社会理念のコン

の組織」であるというのには腑に落ちない。どこからみても、網状平面組織はアナキズムに特有な「組織」である。これについて、もし、労をいとわぬ方は、『農村青年社運動史』八五頁の（注四八）を参照していただきたい。

それには、「石川三四郎は、印刷工組合双書第三集『自由連合の話』第一六頁、第十項に、八網目式平面組織Vなる用語を使用している。この用語の出典は、クロポトキンの著書から来ているのではないかと思うが、筆者は出典については知らない。いずれにせよ網目式平面組織はアナキズム組織論においては、きわめて一般的用語である。」と、わざわざことわつてあるのである。こんども、つきとめたいと思つて、ブルードンの書物を散見したがやはり、浅学で、出典はわからない。しかし、網状平面組織は、八アナキズムの固有の組織方式Vであるし、自由連合は、組織論的には網目式平面組織以外には存在しない。再言すれば、網状平面組織はアナキズムに固有のものであつて、「八太の」とか「石川の」とか言うようなものではない。

また、相沢は、農青社運動を「八太」に結びつけようと努力しているが、八太や岩佐等は、農青運動をはげしく攻撃したことは、当時の自由連合新聞を参照

すれば明白である。相沢自身、岩佐の農青攻撃に前田純一とともに「文責者」となって攻撃に参加している状況であった。しかし、このような過去のエピソードは、今日、全く意味はない。ただ、『イオム』相沢講演で、前述したように、網状平面組織の考え方をすすめていけば、「そこから黒連も自連も解体してしまえという主張が出てくる」と主張していることは、あまりにも甚だしい曲解ではないか。当時、われわれが、黒連・自連の解体を提唱したのは、相沢の指摘とは、まったくことなる原因にもとづくものである。これは歴史的にも明かにする必要がある。これも、『農村青年社運動史』第四章末に、「最近運動の組織並びに形態についての一提案」（資料第九）なるガリ版農青パンフを、ぜひ参照していただきたい。

詳細は、当該資料にゆずるとして、この問題をあつかった第九資料の第四項の冒頭で「こうしたアナキズム運動の衰退は、何人の目にもうたがう余地がなかった。前にも触れたが、昭和五年期（署名人梅本英一）の自由連合新聞は、毎号をあげて、農村恐慌と革命の危機を告げ、紙面も充実したが、同年末、署名人宮川章、ついで大久保卯太郎とかわり新聞そのものも低調をきわめ、そ

の間、昭和六年初頭、自由連合系最期の芝浦争議も惨敗し、組合そのものも瓦解、全国自連も単に名目だけのものとなり、傘下の労働者は四散し、そのあとに黒連一派が、自連にのりこんで、きわめて少数の者たちのグループと化した。大衆運動はすがたを消した。そして、言葉としてだけの（少数者の創造的暴力）ということばが護符のようになりかえされた。農青運動は、既述したように、革命運動の具体的方法のひとつとして、農村の自給自足を中心とする経済的直行行動による全村運動の実践を提唱した。当然のことながら、（少数者の創造的暴力）でなく（民衆の創造的行動）を主張し、コミュニティの樹立と防衛のために、（民衆の創造的武力）が期待された。そして、個人や少数者でなく、全村協議会による全村運動、その終点として地理区画の意識的樹立を提唱した。こうした方法論は、既成の（少数者の創造的暴力主義）（これこそ八太イズムであったのだが）とは、全く対立する理念のうえに立つものであった。一方では、実体としての都市アナキズム運動は衰退し、この行詰まりをカバーするために、中央集権化し、セクト化した教条主義の反動的暴力集団が、都市運動を占拠した。なにゆえに、このように都市運動は衰退したのであるうか。こ

の点について、われわれが到達した結論は、アナキズムの基本的理念である、各人の自主自治、これを行動的にとらえた個人の自主活動―すなわち各人の自主分散活動が退化し、その後退したところに、（結成主義）が抬頭し、行動をおきわすれた集合主義が、アナキズム戦線に充満した（日常闘争はふれない）ということであった。

このような検討の結果として、結成主義からの離脱、集合主義の落し子である（黒連・自連の解散）をももめた『最近運動の組織並びに形態に関する一提案』を、われわれは刊行（ガリ版）、配布したのである。「繰り返して言うが、当時の情況なるものは、まったく自主行動がうしなわれ結成主義が横行し、組織は遺制の温存といった風潮であった。もちろん、『ジェーロ・トゥルダ』に一九二六年、アルシノフが主張した組織論に対して、

マラテスタが筆を執った『無政府主義組織論』が、われわれの主張と合致することをみて、われわれは誤っていないことを信じた。マラテスタが主張したごとく、また、われわれもそう考えたが、組織そのものを否定するのではない。本来、自由合意によるものであり、セクト化してはならないものであるにもかかわらず、組織は、しばしば、それ自体を永続し、権威が付帯することが多い。

必要があつて組織（その組織は本質的には網状平面組織）したとしても、こうした陥りやすい欠点にたいして、われわれは警戒をおこたつてはならない。以上によって、相沢報告の誤謬がはっきりしたと思うので、つぎにうつる。

つぎに述べる点は、きわめてささいなことであるが、軽々しいものではない。海燕版（八四頁）によれば「農民部担当の伊藤（悦）は、長野の南沢製袋松や、（小県の）鷹野原長義らと連絡をとって、長野地方委員会を組織しようとして活動した。この組織活動の必要から『日本農業の諸情勢』というパンフを発行したのであって、積極的に宣伝活動をはじめようとしていた矢先きに党は潰滅したのである。」と書いている。

ついで、一三〇頁では、「起訴されたが執行猶予となつた党员として……鷹野原長義、南沢製袋松（鷹野原・南沢の両名は農村青年社事件でも起訴された）」と書いている。ずっと前に触れた森長弁護士の『日本無政府共產党事件』でも、雑誌『構造』でも、南沢、鷹野原を入党者としてかけたことはなかったし、また、『編さんする会』での相沢の解説でも「伊藤が南沢や鷹野原らを

アジしたが成功しなかった」と述べていた。それが海燕版では急に入党したことにされている経緯はなぜか。海燕版一六頁には司法省刑事局思想部で出した『日本無政府共産党関係検査者身上調査書』について言及している。これは複製版が刊行されており、そのなかに、南沢の肩書に「党長野県北信地区責任者」鷹野原の肩書に「長野県南信地区責任者」となっており、党関係文書配布などのことが書いてある。両君は農村青年社の同地方でのこともすぐれた活動家であったし、その後、昭和九年、伊藤悦太郎が入信してしばしば両人を訪問したことも事実であり、伊藤はよい人物だったので、来れば好遇したことも真実であるが、伊藤はかれらに党については話を持出す機会を見出すことができなかったのである。つきあいはあったが、党については何も聞かず、いわんや入党するということなど有りえない。われわれが『農村青年社運動史』を編さんしたときは、当時の臬残存者をたずねて、面接して資料をとり、判決書も臬地裁から南沢が足をはこんでとってきてくれたのである。したがって伊藤が数回来訪したことなども、その時点で、詳しくわれわれは知っていたし、前述した事実もたしかめていた。おそらく、相沢は官庁本の身上調査書複製版を入

手し、それに記載されていることをうのみにして不実記載をしたものと推定されるが、こうした態度は、ひいてはいろいろな点で過大ではないかという疑問がぬぐい切れなくなる。資料は真実のままでもこそ教訓があるのだと思う。長野県ビュローは虚偽だ。

さいごに二見について一言したい。二見は、筆者が昭和三年から逮捕された昭和七年一月までの、地下潜入時代も、筆者のアジトに往来した七、八名の同志のひとりであった。その頃から、かれは拳銃を所持し、アジト付近のクスギ林で試射し、樹のみきにめりこむ弾丸の深度をはかって、機能テストをすることが趣味のような男だった。筆者は農青運動にはいるためにアジトを替えた。記憶がハッキリしないが、多分、そのままにかれのすがたは消えた。それらのことは省略して、一足とびに、かれがマッカサー指令で刑務所から出てきたときのことについて。かれから湯河原の家に来てくれという手紙がきたので行ってみると、かれは「これからの革命運動はアナだ、ボルだと言っていたのでは、到底、解放は実現しない。いまはよい機会だ、向うでもその気になっている。アナ、ボル共同、一致して（以下47ページに続く）※

※(60ページから続く) べきだ」と言う。共産党の連中も、無期組みがいっせいに解放され、そうした親近感から一時的な感傷的接近があったのは、あの場合考えられる。筆者は、その話にはいきなりには乗れなかった。それよりも、八コンミューン経済研究所というか、優秀な少数のひとたちに協力してもらって、コンミューンの起るべき諸問題とその解決方法、プランの立案など、積極的に備えることが当面の仕事ではないかと思つたので、かれに語ると、よしよカネのことはにまかしておけ、と例のとおりだったが、結局、それを運営するには、かなりな費用を要するので、船はついに出帆することができないままである。

野坂が中国からかえってきた。熱狂するさわぎだった。早速、アナ、ボル共同路線で、野坂の観迎会場で、岩佐作太郎が何番目かに観迎の辞をのべることに打合わせがきまっていたが、日共の連中が野坂を十重、二十重にかこみ、共同路線もクソもない。岩佐の出る幕はなく、これをシオに、共同路線も崩壊したかたちと聞いているが、これは、しかし、アナキズム運動にはよい教訓であった。二見の、よく言えば創造的精神は尊重すべきだが、内容的に鍛練されないかぎり、それはひとつの八おもいつきに過ぎないだろう。党の問題についても、八山に入るものは山を見ずVであってはならない。しかし君はもう髪姿にはいない。この言葉を君の冷いむくろにささげよう。(完)

#### アナキズム 紙誌 紹介

リベルテール	月刊	東京都練馬区大泉学園町二一九〇	萩原方	リベルテールの会
アナキズム	季刊	静岡県富士宮市杉田二五一	C I R A	N I P P O N 気付
黒の手帖	不定期	東京都新宿区北山伏町三三	大沢方	黒の手帖社
リペーロ	月刊	京都市左京区田中門前町二八一五	リペーロ社	
無政府主義研究	季刊	東京都豊島区高田三―三八―二三	高田ハイツ	二〇六 玄曜社